様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月２０日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2011
課題番号：22730510
研究課題名（和文）　テキストマイニングによる保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の道徳指導観の比較検討
研究課題名（英文）　Comparison of Views on Moral Guidance among Nursery School, Kindergarten, and Elementary School Teachers via Text Mining
研究代表者　越中　康治（ETCHU KOJI）
宮城教育大学・教育学部・講師

研究者番号：70452604

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、保育者（保育士及び幼稚園教諭）と小学校教諭の道徳指導観を比較検討することであった。現職の保育者・小学校教諭と保育者・教員養成課程の学生を対象として、幼児期に道徳性や規範意識の芽生えを培う上で配慮すべきことについて自由記述を求め、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。その結果、小学校教諭が道徳教育の目標や指導内容を重視する記述を行うのに対して、保育者は子どもの思いや気持ちに寄り添うことを重視する記述を行う傾向にあることが示された。また、こうした相違は養成課程の学生の段階から認められるものの、学生は現職者よりも賞罰による直接的な指導を志向する傾向にあることが示された。

研究成果の概要（英文）：This research compares the views of childcare workers (nursery school and kindergarten teachers) and elementary school teachers on moral guidance. The subjects of the study are current childcare workers, elementary school teachers, and trainees undergoing childcare and teacher-training courses. They were asked to write freely about what they thought fostered morality and normative consciousness in early childhood. Text mining was used to analyze their output. The results showed that childcare workers tend to emphasize the importance of embracing children's thoughts and feelings, whereas elementary school teachers tend to emphasize moral education goals and guidance contents. In addition, although the distinction in views between childcare workers and elementary-school teachers was echoed in the views of the trainees, the results showed that the trainee childcare workers and teachers tended to prefer direct guidance through rewards and punishments more than current childcare workers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、道徳性、道徳教育、指導観、発達観、テキストマイニング

１．研究開始当初の背景

新しい学習指導要領において「生きる力を育む」という教育の目標理念が改めて確認される中、道徳教育の充実・強化を図ることが喫緊の課題となっている。各学校段階における重点が明確に示される一方で、道徳教育はすべての学校段階において一貫して取り組むべきものであることが強調され、「接続に配慮」することが求められている。しかし、とりわけ保育所・幼稚園と小学校との接続には、「小１プロブレム」という言葉もあるように、多くの困難がある。

接続を困難にする要因としてまず考えられるのが、学校種による指導形態の相違である。環境を通して規範意識の芽生えを培う「幼児教育」（保育）と道徳の時間を「要」として道徳的価値観の形成を図る「小学校教育」とでは、指導形態に大きな相違があり、保幼小の異校種間で共通理解を図ることは容易ではないものと推察される。

また、道徳教育へのアプローチは、一般に子どもに特定の道徳的価値を理解させ、習慣化させることを目指す「伝統的アプローチ」（インカルケーションや品性教育など）と、こうした価値の教え込みに反対する「発達的アプローチ」（価値の明確化や認知発達理論に基づく道徳教育）に大別される（Nucci, 2006; 首藤, 2009）。さらに、２つのアプローチを統合する様々な試みがなされる（伊藤, 2009）一方で、理論的基盤の異なるアプローチの統合では心理・発達的観点が軽視され「教え込み」偏重となる傾向にあるとの批判もあり（Nucci, 2006）、百家争鳴である。例えば、ひとくちに幼児教育といっても、幼稚園教育要領が改訂されるたびに「教え込みや強制はかえって道徳性や規範意識の芽生えをつみ取ることになる」（岩立, 2008）との指摘が繰り返されるように、道徳指導へのアプローチは一様でないのが現状である。

保幼小の接続の阻害要因をさらに突き詰めていくと、最終的には一人ひとりの教師・保育者の道徳指導観の多様性の問題に行きつく。これまで道徳教育に関しては、学校園単位で道徳指導観を共有していくことの重要性が指摘されてきた（文部科学省, 2001）。しかし、保幼小の接続に配慮する上では、さらに一歩踏み込んで、地域の保育・教育機関が一体となって、幼児期から児童期にかけての道徳発達・指導に関する共通理解を目指す必要がある。そのためにも、道徳指導観に関して、現時点でどの程度認識が共有され、どこに相違があるのか、その現状を把握する必要がある。特に教師や保育者の指導観はその原型が学生時代に形成され、熟達する中で変容していくことを踏まえると、養成段階も含めて、若手から熟練に至るまでの発達的な検討が急務である。

２．研究の目的

教師・保育者の道徳指導観は、校種（幼保と小）や教師・保育者としての熟達レベル（学生、若手、熟練）などによって多様であるものと推察される。そこで本研究では、これらの要因が及ぼす影響を中心に、教師や保育者における道徳指導観の多様性と共通性を、テキストマイニングによる自由記述文の分析から探索的に検討することを目的とした。

本研究において、テキストマイニングを方法の中核に据えたのは、事前に予備的検討を行ってきた結果から、道徳指導観の違いは質問項目への評定よりも自由記述において明確になると予想されたためである。予備調査として道徳指導観の相違を評定項目から捉える試みを行ったところ、項目を作成しようとすると不自然なものとなってしまう上に、調査対象者の回答も社会的に望ましい方向に歪められてしまう可能性が示唆された。他方、自由記述では回答者が日頃から用いているより自然な言葉を捉えることが可能となる。さらには、テキストマイニングの手法を用いることで、客観的・数量的な分析も可能となる。以上の理由からこの方法を採用した。

従来の道徳教育に関する研究の多くは、特定の理論的アプローチに基づく実践的研究あるいは優れた教育者や熟練保育者の指導観に関する質的な検討が中心であり、広く一般の教師や保育者を対象として指導観の共通性と差異性を俯瞰的に捉えようとする試みは必ずしも多くはなされてこなかった。本研究では、テキストマイニングによる自由記述の分析から、この未検討の課題にアプローチした。

３．研究の方法

本研究の目的は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の道徳指導観を比較検討することであった。この目的のために、養成段階の学生から若手・熟練の現職教師及び保育者までを対象とした質問紙調査を実施し、保幼小の接続期に道徳性や規範意識の芽生えを培う上でどのような指導が必要と思うかについて率直な意見（テキストデータ）を収集した。その上で、テキストマイニングによる分析から、道徳指導観の共有（あるいは多様性）の実状を探った。具体的には、校種（保と幼、小）や個人の熟達レベル（学生、若手、熟練）による道徳指導観の差異と共通性を明らかにすることを目的として対応分析を行った。

４．研究成果

(1)道徳指導観の比較検討

幼児期に道徳性や規範意識の芽生えを培う上でどのようなことに配慮が必要かについて自由記述を求め、回答が得られた保育者（保育士 35 名、幼稚園教諭 44 名）79 名、小

学校教諭（主に低学年担当者）72 名、大学生（教育学部）128 名、短期大学生（幼児教育学専攻）230 名を分析対象とした。保育者（保）及び小学校教諭（小）については、経験年数に基づく中央値折半により、それぞれを「若手～中堅」（若）または「中堅～熟練」（熟）として、保若（21 年未満）39 名、保熟（21 年以上）40 名、小若（23 年未満）36 名、小熟（23 年以上）36 名の 4 群に分けた。大学生（大）は、大未（幼児教育コースの実習未経験学生）37 名、大済（幼児教育コースの実習経験済学生）24 名、大養（幼児教育コース以外の教員養成課程学生）42 名、大非（非養成課程学生）25 名の 4 群に、短期大学生（短）は、短未（実習未経験学生）119 名と短済（実習経験済学生）111 名の 2 群に分けた。

分析は R（ver2.10.1）と RMeCab（ver0.87）を用いて行った。自由記述文を形態素解析にかけ、「名詞」と「動詞、形容詞、副詞」を抽出し、それぞれについて、10 群のいずれかで出現頻度が上位 15 以内にランクインした語（全体での出現頻度が 20 未満のものを除く）を分析の対象とした。なお、名詞については、協議の上、重要でないと判断された語（「こと」「よう」など）と教示文に記した語（「道徳」「規範」など）を、動詞等については教示文に記した「培う」のみを予め削除した。また、異表記（「ほめる」と「褒める」など）は統一する処理を行った。最終的に抽出された名詞 33 語、動詞等 31 語の出現頻度についてそれぞれ対応分析を行った。2 つの軸の累積寄与率は、名詞で 73.0%（第 1 軸 51.6%、第 2 軸 21.4%）、動詞等で 67.0%（第 1 軸 35.6%、第 2 軸 31.4%）であった。

対応分析の結果の散布図（Figure 1、 2）から、名詞と動詞等のいずれについても、第 1 軸が現職者と学生（名詞は正が学生、動詞等は正が現職者）を、第 2 軸が小学校教育と幼児教育及び保育（いずれも正が小、負が幼保）を弁別する次元と解釈できる。保育者と小学校教諭は、経験年数にかかわらず、それぞれに学生とも異なる特徴的な記述をしていた。小学校教諭（【小若】【小熟】）の記述と関連の強い語は、「集団」「場面」「心」などの名詞と「育てる」「守る」「せる」などの動詞であった。また、幼児教育を専門としない学生（【大養】【大非】）と同様に、「きまり」「しっかり」などの語も多用された。データと照合すると、小学校教諭では「集団で生活する上でのきまりを守る、意識させる」「しっかり教える、学ばせる」「生活の場面で」「心や態度を育てる」などの記述が特徴的であった。

他方、保育者（【保若】【保熟】）の記述と関連の強い語は、「友達」「思い」「トラブル」などの名詞、「見る」「伝える」などの動詞、「どう」という副詞であった。また、幼児教育を専門とする学生と同様に「気持ち」「理解」などの語も多用された。データと照合すると、保育者では「子どもの様子を見る」「子どもの目を見て話を聞く」「友達とのトラブル」「友達の思い」「どうだったか」「どうしたかったのか」「子どもの思い」「気持ちを伝える」などの記述が特徴的であった。

学生が「見守りつつ、教えてあげ、ほめてあげる」（主に【短未】）、「悪いと教える、叱る、注意する」（主に【大非】）のように賞罰による直接教示を志向するのに対して、小学校教諭は道徳教育の目標や指導内容を、保育者は子どもの思いや気持ちに寄り添うことを重視する傾向にある可能性が示唆された。

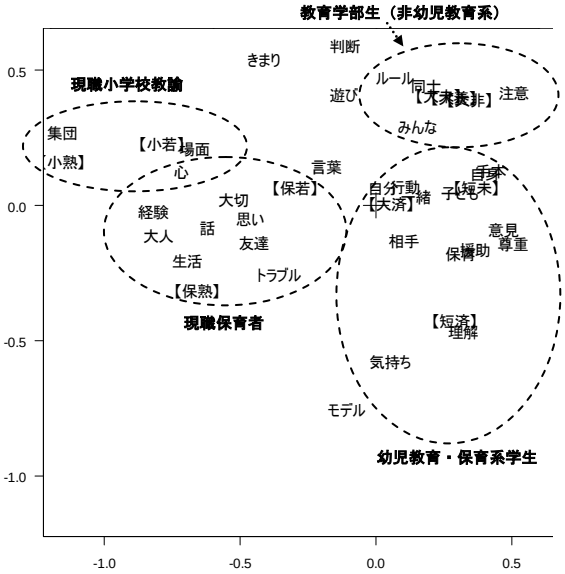

Figure 1　自由記述に含まれる「名詞」の対応分析の結果の散布図

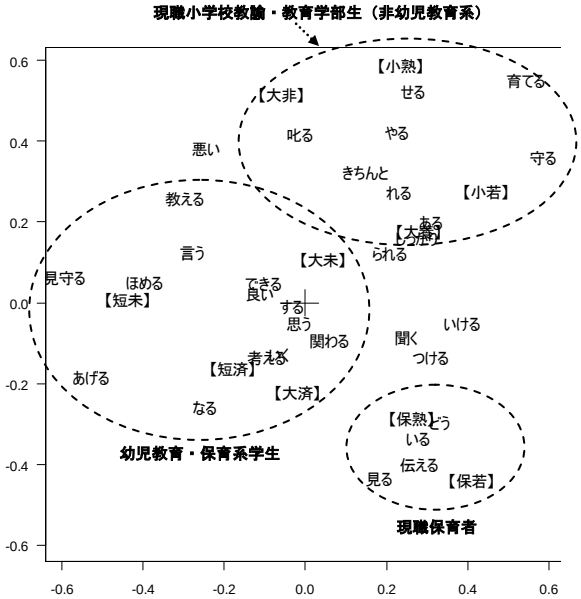

Figure 2　自由記述に含まれる「動詞、形容詞、副詞」の対応分析の結果の散布図

(2)道徳性の芽生えに関する認識の比較検討

保育者と小学校教諭の道徳指導観について、上述の通りの相違が認められた。こうした道徳指導観の相違は、そもそも道徳性の芽生えのとらえ方が異なることに起因する可能性もある。そこで、実際のところ、両者が道徳性の芽生えをどのようにイメージをしているのかについて検討を行うこととした。

保育者 61 名と小学校教諭 53 名から、「幼児期における道徳性の芽生えとはどのようなものか」について自由記述（箇条書きで 5 つ以内）による回答を得た。その上で、同一の問いに対する保育系短期大学生 412 名（K 短大及び T 短大の 1、2 年生）の自由記述とともに分析・検討を行った。

テキスト分析には、PASW Text Analytics for Surveys 3.0.4（以下、TAFS）を用いた。まず、自由記述について感性分析（肯定的／否定的などの意味を把握する）によるキーワード抽出を行った上で、「タイプ」（キーワードをグルーピングするための文法的あるいは意味的識別子）の出現頻度に基づくカテゴリの作成を行った。TAFS には「品詞タイプ」（「名詞」「動詞」など）と「感性タイプ」（「ポジティブ」「ネガティブ」など）の 2 タイプがあるが、本研究では「感性タイプ」に基づいてカテゴリを作成した（出現頻度は 30 回以上に設定した）。以上の手続きを経て、「ポジティブ」に分類されるタイプとして、「良い」（「素直」「良い」「仲良い」など）、「優しい」（「優しい」「優しくする」など）、「感謝」（「ありがとう」「感謝の気持ち」など）、「遊ぶ」（「遊ぶ」「楽しい」など）の 4 つを、「ネガティブ」に分類されるタイプとして、「悪い」（「悪い」「けんか」など）、「謝罪」（「ごめんなさい」「謝る」など）、「我慢」（「我慢」「我慢する」など）の 3 つを分析の対象とした（なお、TAFS では本来、「優しい」は「褒め・賞賛」、「遊ぶ」は「楽しい」、「我慢」は「悲しみ全般」という名称であるが、今回のデータの実態にあわせて名称をわかりやすく変更した）。

次に、6 群（保育者、小学校教諭、K 短大 1 年、K 短大 2 年、T 短大 1 年、T 短大 2 年）における上記 7 タイプの出現頻度について対応分析を行った。2 つの軸の累積寄与率は 77.7%（第 1 軸 49.0%、第 2 軸 28.7%）であった。対応分析の散布図（Figure 3）から、第 1 軸は現職者と短大生を（正が現職者）を、第 2 軸は保育者・短大 2 年生と小学校教諭・短大 1 年生を（正が保育者・短大 2 年）弁別する次元と解釈できそうである。

プロットの状況を踏まえつつテキストデータと照合すると、短大生は現職者に比して、「ありがとう」（感謝）や「ごめんなさい」（謝罪）が言えること、あるいは他者に優しくすること（優しい）を道徳性の芽生えとして挙げる傾向にあるといえそうである。また、小学校教諭では、保育者らに比して、やってはいけないこと・悪いことを理解すること（悪い）や我慢できるようになること（我慢）を道徳性の芽生えとして挙げる傾向にあり、ポジティブな内容（良い）についての言及が相対的に少なかった。他方、保育者では、道徳性の芽生えを遊びの中に見出す記述が相対的に多くみられた。こうした認識の相違が、幼保小で異なる道徳指導観の背景にあると推察された。

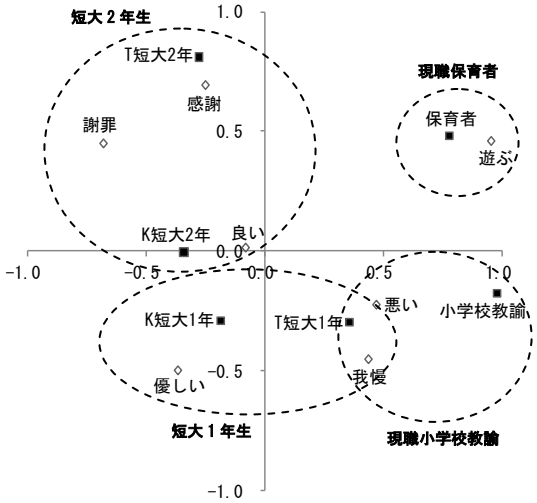

Figure 3　道徳性の芽生えに関するイメージの対応分析の散布図

(3)その他の検討と今後の展望

本研究では、上記の 2 つの検討の他に、道徳指導観と関連して、教育学部生を対象に、体罰に関する認識について一連の検討を行った。さらには、道徳性の芽生えを培う上で親と保育者のそれぞれが果たすべき役割について、保育者養成課程の短期大学生と教育学部生の認識を比較検討した。これらの一連の研究から明らかにされたことは、現職の保育者、教諭、さらには学生のそれぞれが多様な道徳発達観・指導観を持っているが、校種（幼保と小）や教師・保育者としての熟達レベル（学生、若手、熟練）による特徴が認められるということであった。特に、小学校教諭は道徳教育の目標や指導内容を、保育者は子どもの思いや気持ちに寄り添うことを重視する傾向にあることが示された。

こうした道徳指導観の差異について考察していく上で示唆的なのが、倉橋惣三の『幼稚園真諦』である。倉橋はその冒頭で、保育・教育についての考え方に種々の意見が生じる背景には「人生観の相違」があり、教育態度に関しても、教育の目的を本拠とした態度と教育の対象の特質に基づく態度のふたつがあると指摘した。その上で倉橋は、幼児教育・保育は対象本位になされるべきであると論じている。本研究の結果について大雑把な

とらえ方をすると、今日の保育者と小学校教諭との間にも、同様の教育態度の違いがあると指摘し得るものと思われる。

先述の通り、道徳教育の方法は、一般に、子どもに特定の道徳的価値を理解させ、習慣化させることを目指す「本質主義」あるいは「伝統的アプローチ」と、こうした価値の教え込みに反対する「進歩主義」あるいは「発達的アプローチ」に大別される（越中，2010；伊藤，2009；Nucci，2006；首藤，2009）。教育的価値の伝達を重視する前者には、インカルケーション（inculcation）、品性教育（character education）などと呼ばれるアプローチがある。他方、このような価値の伝達・強制を軸とした相対主義的・伝統的アプローチに対して、子どもの自発性・主体性を重視しているのが、Kohlberg の認知発達理論に基づく道徳教育に代表される、後者のアプローチである。

これらの２つのアプローチについては、両者を統合しようとする様々な試みがなされている(Nucci，2006)。例えば、Narvaez(2006)の統合的倫理教育（integrative ethical education）もそのひとつであるし、Positive psychology などに依拠している Berkowitz，Sherblom，Bier，& Battistich（2006）の Positive youth development（PYD）も同様である。また、「アメリカでは一種のブームとなっている」（首藤，2009）と評される Lickona の Character education も統合的なアプローチのひとつといえよう（Nucci，2006）。今日、道徳教育については、「自主性・主体性の尊重」と「価値の伝達（強制）」を両立すべきという考え方が一般的になっているといえるのかも知れない。しかしながら、他方で Nucci（2006）のように、理論的基盤の異なるアプローチの統合では心理・発達的観点が軽視され「教え込み」偏重になると警鐘を鳴らしている研究者もいる。

保育者・教師及び学生の道徳指導観についても、価値の伝達を重視する考え方、自主性・主体性を重視する考え方といった違いがあり、さらには、2 つの考え方を統合し得るものとみなすか否かの違いもあるものと推察される。例えば、倉橋の指導観は明らかに進歩主義的・発達的アプローチと呼べるものであり、統合的なアプローチに与するものではないと思われる。しかしながら、すべての保育者が同様の指導観を抱いているわけではないだろうし、小学校教諭の指導観もまた様々であろう。本研究は、保育者と小学校教諭（さらには学生）の特徴をあくまで大まかに、相対的にとらえたものである。指導観の多様性に鑑みると、こうした研究とは別に、一人ひとりの教師・保育者（及び学生）の考えや思いを丁寧にとらえていく試みも必要であろう。

今後、一人ひとりの教師・保育者の道徳指導観を丁寧にとらえていく上では、倉橋が言うところの「人生観の相違」にも目を向けることが必要となるであろう。Nucci（2006）は、①自由主義（Liberalism）と共同体主義（Communitarianism）の対立（自由の尊重か、美徳か）、②モダニズム（Modernism）とポストモダニズム（Postmodernism）の対立（道徳発達は普遍的か否か）、③モダニズムとプレモダニズム（Premodernism）の対立（進歩主義か、保守反動的復古主義か）の３つの視点から道徳教育に対するアプローチの対立をとらえているが、この視点は一人ひとりの教師・保育者の道徳指導観をとらえる上でも有用であると思われる。今後は、教師・保育者の人生観あるいは社会態度などの観点を交えつつ、さらに詳細な検討を進めていく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①越中康治、小津草太郎、白石敏行、保育士及び幼稚園教諭と小学校教諭の道徳指導観に関する予備的検討、宮城教育大学紀要、査読無、46 巻、2012、pp.203-211.

②越中康治、攻撃行動に対する幼児の善悪判断に及ぼす攻撃者の権威の影響、幼年教育研究年報（広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設）、査読有、33 巻、2011、pp.97-103.

③越中康治、体罰に関する大学生の信念に及ぼす意見交換の影響、宮城教育大学紀要、査読無、45 巻、2011、 pp.217-225.

④藤木大介、上田七生、樟本千里、若林紀乃、越中康治、松井剛太、長尾史英、山崎　晃、認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響、梅光学院大学論集、査読無、44 巻、2011、pp.11-21.

〔学会発表〕（計１３件）

①越中康治、道徳性の芽生えに対する保育者と小学校教諭のイメージ―保育系短期大学生のイメージとの比較検討―、日本発達心理学会第 23 回大会、平成 24 年 3 月 10 日、名古屋国際会議場

②越中康治、道徳性の芽生えに対する保育学生のイメージ、日本乳幼児教育学会第 21 回大会、平成 23 年 12 月 4 日、東京成徳大学・東京成徳短期大学

③越中康治、道徳性の芽生えを培う上で親は何に配慮すべきか？―高校生及び大学生と子育て経験者の記述の差異―、日本感情心理学会第 19 回大会・日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会合同大会、平成 23 年 9 月 4 日、京都光華女子大学

④越中康治、目久田純一、中村多見、小津草

太郎、前田健一、道徳性の芽生えを培う上で親と保育者は何に配慮すべきか？（2）―テキストマイニングを用いた保育者養成系学科に所属する短期大学生の認識の検討―、日本教育心理学会第 53 回総会、平成 23 年 7 月 25 日、北海道立道民活動センター かでる 2・7
⑤目久田純一、中岡千幸、越中康治、保育者養成系学科に所属する短期大学生の授業評価基準、日本教育心理学会第 53 回総会、平成 23 年 7 月 25 日、北海道立道民活動センター かでる 2・7
⑥越中康治、幼児は戦争について何を語るか？、日本保育学会第 64 回大会、平成 23 年 5 月 21 日（東日本大震災により「発表に関する特別取扱い」を受けた）、玉川大学
⑦越中康治、目久田純一、中村多見、小津草太郎、前田健一、道徳性の芽生えを培う上で親と保育者は何に配慮すべきか？―テキストマイニングによる教育学部生の認識の検討―、日本発達心理学会第 22 回大会、平成 23 年 3 月 25 日（東日本大震災により「大会は成立したものとするが、開催期間に会場には参集しない」措置となった）、東京学芸大学
⑧越中康治、26 章 Integrative ethical education（D. Narvaez）紹介と話題提供、「道徳性・向社会性」分科会（企画）、二宮克美（司会・話題提供）、長谷川真里、寺井朋子、越中康治（話題提供）、道徳性発達の最前線を知る―Part 3、日本発達心理学会第 22 回大会、平成 23 年 3 月 25 日（東日本大震災により「大会は成立したものとするが、開催期間に会場には参集しない」措置となった）、東京学芸大学
⑨越中康治、テキストマイニングによる体罰に関する賛否の理由づけの比較検討、日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会、平成 22 年 10 月 10 日、慶應義塾大学
⑩越中康治、教育学部生の道徳教育観と権威主義的伝統主義との関連、日本社会心理学会第 51 回大会、平成 22 年 9 月 17 日、広島大学
⑪越中康治、小津草太郎、白石敏行、保育士及び幼稚園教諭と小学校教諭の道徳指導観―テキストマイニングによる比較検討―、日本教育心理学会第 52 回総会、平成 22 年 8 月 29 日、早稲田大学
⑫藤木大介、上田七生、若林紀乃、越中康治、松井剛太、長尾史英、山崎　晃、認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響の検討、日本保育学会第 63 回大会、平成 22 年 5 月 23 日、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学
⑬越中康治、白石敏行、幼児教育を学ぶ短期大学生の道徳指導観―実習経験の有無と保育者効力感の高低による相違の検討―、日本保育学会第 63 回大会、平成 22 年 5 月 23 日、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学

〔図書〕（計３件）
①越中康治、ミネルヴァ書房、道徳性の発達（深田博己（監修）、湯澤正通、杉村伸一郎、前田健一（編）、心理学研究の新世紀③ 教育・発達心理学）、2012、pp. 222-237.
②越中康治、北大路書房、子ども集団と保育の環境（清水益治、無藤 隆（編）、新 保育ライブラリ 子どもを知る 保育の心理学 II）、2011、pp. 59-65.
③越中康治、ミネルヴァ書房、道徳性と向社会的行動の発達（無藤　隆、中坪史典、西山修（編）、新・プリマーズ／保育／心理 発達心理学）、2010、pp. 98-109.

６．研究組織
(1)研究代表者
越中　康治（ETCHU KOJI）
宮城教育大学・教育学部・講師
研究者番号：70452604